『浄土真宗聖典全書』第一巻「三経七祖篇」の発刊に向けて

Ⅰ はじめに

昨年四月からはじまりました親鸞聖人七百五十回大遠忌法要は、今年厳修された御正当をもって無事円成いたしました。教学伝道研究センター〈本願寺教学伝道研究所――聖典編纂部門――〉では、この大遠忌法要に際し、宗門長期振興計画「教学・伝道の振興」の一環として『浄土真宗聖典全書』（以下『聖典全書』と略称）の編纂を推進しております。このうち、第二巻目「宗祖篇 上」を二〇一一（平成二十三）年三月に刊行しました。現在は、二〇一二（平成二十四）年度刊行予定の「三経七祖篇」の編纂作業を進めています。

Ⅱ「宗祖篇 上」の発刊

昨年度の三月に発刊いたしました「宗祖篇 上」の大きな特徴としては、「宗祖篇 下」（平成二十八年発刊予定）と合わせて、現在学界で認知されている親鸞聖人の真筆をすべて翻刻するという点が挙げられます。

親鸞聖人の真筆については、古来より今日まで伝えられているものもありますが、近年も『道綽禅師略伝』や経文や和讃などの断簡類が発見されています。中でも二〇一〇（平成二十二）年十月に発表された第二十・二十二願文（断簡）などは最も新しいもので、「宗祖篇上」では「真筆願文・経文・和讃」の中に収録されています。発刊時期から逆算すると、わずか五カ月前に発見された親鸞聖人の真筆を聖典に収録するというのは、弛みない研究と日常の情報収集はもちろんのこと、翻刻するための迅速な対応がなければできないことです。これは、最新の情報を可能な限り反映するという『聖典全書』の編纂姿勢を貫いた結果であると言えます。

親鸞聖人のお書きになられたものは、漢文・和文のいずれもの文体があり、その性格も真宗教義を体系的に顕された

『教行信証』などの自著をはじめ、門弟の領解のために著された「文意」、和讃や御消息（お手紙）、経典などの抜書から名号・御影の讃銘まで実に多様です。それらさまざまな性格のお聖教をより拝読しやすくするために、段組を用いたり、原本の状態を図示するなど版面の随所に工夫を凝らしました。

こうして、『聖典全書』「宗祖篇 上」は、既刊の聖典にはない特性をもった聖典として発刊することができました。このような『聖典全書』の編纂姿勢は、続く五巻にも通じるもので、次に発刊予定の「三経七祖篇」についても同様の姿勢で取り組んでいます。

如來大悲之教傳經作頌生偈復述長行重
釋梵言優婆提舍此間无正名相譯者舉一
隅可名為論所以无正名譯者以此間本无
佛故如此間書籍孔子而稱經餘人創作皆
名為子國史國紀之徒各別斟何然佛所說
十二部經中有論議經名優波提舍若復佛
諸弟子解佛經教与佛義相應者佛亦許名
優波提舍以入佛法相故此間亦論直是論
義而已直得正譯彼名耶又如女人於子稱
母於兄弟稱妹如是等事皆隨義名別若但以
女名況談母妹乃不失女之大體豈舍尊卑
之義乎此所去論名復如是是以仍曰論焉

『往生論註』親鸞聖人加点本（本願寺蔵）

Ⅲ 本願寺における三部経・七祖聖教の刊行

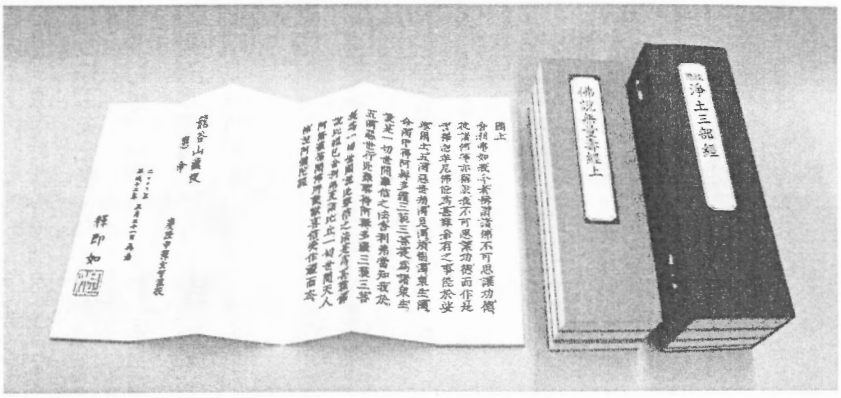
第一巻目にあたる「三経七祖篇」の内容は、「阿弥陀仏のみ教えが説かれた正依の根本経典の浄土三部経とその異訳の経典、親鸞聖人に至るまで浄土真宗の教義を相伝した七高僧の論釈」です。詳しくはⅣで述べますが、その前に本願寺の蔵版として三部経あるいは七祖聖教が刊行されてきた歴史を繙いてみますと、それは江戸時代まで遡ることができます。

まず浄土三部経は、安永元（一七七二）年に京都慶証寺の玄智が校刻した『大谷校点浄土三部経』を、文化八（一八一一）年に本如上人が本願寺蔵版『校点浄土三部経』として再刻されており、明治十一（一八七八）年には明如上人が『標註浄土三部経』を本願寺蔵版として刊行されています。また、平成十二（二〇〇〇）年には、玄智の『大谷校点浄土三部経』をもとにして即如上人が『浄土三部経』を再治されています。

次に七祖聖教は、寛政十一（一七九九）年に、大坂長円寺の崇興により刊行された『七祖聖教』を、文政九（一八二六）年に広如上人が本願寺の蔵版とされています。

この他、親鸞聖人七百回大遠忌の記念事業として企画された聖典意訳の編纂では、昭和三十三（一九五八）年に『浄土三部経』が、また昭和三十九（一九六四）年より『七祖聖教（上・中・下）』がそれぞれ刊行されています。

さらに本願寺から刊行された聖教として、文明五（一四七三）年蓮如上人による「正信偈・和讃」をはじめ、天文六（一五三七）年ごろに開版された「御文章」、明和二（一七六五）年に刊行した和語聖教を集めた「真宗法要」があり



『大谷校点浄土三部経』（本願寺蔵）

ます。近年では昭和六十（一九八五）年に阿弥陀堂の修復記念として『浄土真宗聖典（原典版）』が、また、顕如上人四百回忌法要記念・本願寺寺基京都移転四百年記念として昭和六十三（一九八八）年に『同（註釈版）』、平成四（一九九二）年に『同（原典版　七祖篇）』が、そして蓮如上人五百回忌法要記念として平成八（一九九六）年に『同（註釈版　七祖篇）』と『浄土三部経（現代語版）』が刊行されています。

Ⅳ「三経七祖篇」の内容と収録聖教の特徴

上述のように、本願寺における刊行の歴史をみてきますと、三部経と七祖聖教が一冊になっている聖典はこれまで刊行されていないことがわかります。よって、このたびの『聖典全書』で初めて一冊として刊行されることになります。その収録予定のものは、左記の通りです。

○浄土三部経（無量寿経・観無量寿経・阿弥陀経）

○異訳大経（大阿弥陀経・平等覚経・無量寿如来会・荘厳経）

○異訳小経（称讃浄土経）

○七祖（易行品・十二礼・浄土論・往生論註・讃阿弥陀仏偈・略論安楽浄土義・安楽集・観経疏・法事讃・観念法門・往生礼讃・般舟讃・往生要集・選択集）

このように収録の内容を見てみますと、これまで本願寺より刊行された聖典には収録されていないものがあることに気づきます。すなわち、親鸞聖人が引用された「異訳」と呼ばれる訳出年代の異なる『大経』あるいは『小経』がまず挙げられます。また、親鸞聖人が編集したとされる法然聖人の法語集『西方指南抄』の中で「曇鸞大師作」と記されている『略論安楽浄土義』もそうです。これらは、編纂方針によって収録されてきませんでしたが、これらすべてを収録している点は、『聖典全書』「三経七祖篇」の大きな特徴ということができます。

Ⅴ 底本対校本の選定と最新の研究成果の反映

このたびの「三経七祖篇」に収録され

るものは、印度・中国・日本において撰述あるいは訳出されたものですが、『往生要集』と『選択集』とを除き、そのほとんどは中国より伝来したものです。よって、原本に返点や送り仮名が付されていない白文のものがほとんどです。これらについては、適宜訓点を補って読解の便をはかる予定です。

また、「三経七祖篇」に収録される聖教の中には、親鸞聖人のみならず、他宗においても敬重されているものも多くあります。原本の所蔵元は真宗の寺院にとどまらないため、宗派を問わず赴いて底本対校本の収集に努めました。また、底本対校本については新資料の発見や最新の研究に基づいた選定を心がけています。

その一例として曇鸞大師の『往生論註』を挙げておきたいと思います。『往生論註』は、上下両巻が揃っているものとしては、本願寺に所蔵される鎌倉時代の刊本が最古です。親鸞聖人が御自筆によって加点されているものとして、特によく知られています。書写本には、これより古いと考えられているものが従来もありましたが、最近になって新たに最古の書写本が発見されています。これらはいずれも、上下両巻の揃わない端本ではありますが、大変貴重な発見であったことから、『聖典全書』でも対校本として採用する予定です。これは聖典史上、収録自体はじめてのこととなります。

Ⅵ「宗祖篇 上」との連動性

「宗祖篇 上」でもそうでしたが、「三経七祖篇」では、『浄土真宗聖典（註釈版）』や『真宗聖教全書』（大八木弘文堂）との連絡ページを付します。今回、収録しているものはすべて漢文体ですから、書き下し文である『註釈版』との連絡をはかることで、読解の大きなたすけとなるでしょう。

そして、最大の特徴は「宗祖篇 上」との連絡ページを付すことです。これは、ページ数だけでなく、聖教名と親鸞聖人の引用されたご文の範囲も知ることができるものです。これにより、親鸞聖人がどの部分を引用されたのかが一目でわかり、三部経や七祖聖教のどの部分を何回引用されているのかも、容易に確認することができます。また、同様に「三経七祖篇」内での連絡も行う予定です。

Ⅶ 最後に

以上みてきたように「三経七祖篇」は、三部経や七祖聖教などの一つひとつを一冊の聖典で学ぶことができ、なおかつ親鸞聖人のお心を窺うことのできる聖典となるでしょう。また、これまで紹介した以外にも、付録の充実や各聖教の解説など、読解に配慮した聖典となるよう作業を進めているところです。二〇一二（平成二十四）年三月発刊予定の「三経七祖篇」にご期待ください。